

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

『テラスハウス』事件をめぐる一考察： BPO放送人権委員会による審理開始をきっかけに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 魚住, 真司 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaignaidai.repo.nii.ac.jp/records/8003

『テラスハウス』事件をめぐる一考察： BPO放送人権委員会による審理開始をきっかけに*

外国語学部准教授 魚住真司

I. はじめに

II. 『テラスハウス』事件の概要

III. リアリティ番組とは

IV. 一時的考察

V. おわりにかえて

『テラスハウス』事件関連・時系列表

参考文献・資料

*メディア研究に従事する者として、メディアの被害者とも言える木村花さんに哀悼の意を表したい。

I. はじめに

2020年5月23日、プロレスラーの木村花さん（当時22歳、以降「花さん」と表記）が自ら命を絶った。当時、花さんは「テラスハウス」もしくは「テラハ」と呼ばれるテレビ番組に出演しており、ある回からその内容について花さんへの個人攻撃がインターネット上で始まった。花さんの自死は、これを苦にしたものだと考えられている。遺族は番組制作に携わったテレビ局に対し、過剰な演出が花さんを追い詰める結果につながったとして、放送倫理・番組向上機構（BPO）を構成する三委員会の1つである放送人権委員会¹、テレビ局の謝罪を求めて申立てた。BPOは、1980～90年代に多発した放送番組による人権侵害や捏造事件への反省をもとに、放送への信頼回復を目指して設立された放送局の自主的機関である。その委員会決定に法律上の拘束力

¹ 申立て当時の放送人権委員会のメンバーは次の通り（敬称略）。奥武則（大学教員）、市川正司（弁護士）、曾我部真裕（大学教員）、紙谷雅子（大学教員）、城戸真亜子（洋画家）、國森康弘（写真家・ジャーナリスト）、二関辰朗（弁護士）、廣田智子（弁護士）、松田美佐（大学教員）、水野剛也（大学教員）。

は無いものの、委員会が公表する放送局への「勧告」には一定の効力がこれまで認められている。

ところで、放送人権委員会による本件の正式な事案名称は「リアリティ番組出演者遺族からの申立て」である。一方、本稿では花さんへの中傷が刑事事件化したことをふまえ、本件を「『テラスハウス』事件」と総称する。したがって、本稿では花さんのことを「被害者」と表記することがある。ただし、花さんの母親である木村響子さん（以降「響子さん」と表記）は、弔辞で「花のことで自分を責めないでください。誰かを責めないでください。何かを恨まないでください。ヘイトのスパイラルを止めてください。」と述べている。遺族の意思を尊重するにあたり、本稿の目的が特定個人の責任追及へと向かわないようにしたい。また本稿は、放送人権委員会の委員会決定を考察した上での「論文」として寄稿する予定であったが、本稿執筆時点においては、まだ委員会決定が公表されていない²。したがって本稿は、とりえず現時点で可能な考察にもとづく「研究ノート」とする。本稿文末に付した関連・時系列表ならびに長大な参考文献・資料については、新たに論を起す際に有用と思われるもの全てを含めている。

Ⅱ. 『テラスハウス』事件の概要

木村花さんは、2016年に18歳でプロレス界にデビューした女性選手である。花さんは、2019年7月からフジテレビで放送が始まった番組『TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020』（以降「『テラスハウス』」と表記）に、第20話から出演していた。『テラスハウス』は、若い数名の男女が一軒家で共同生活を送るとどのような事態が起こるのか見せようとする、いわゆる「リアリティ番組」の一つである。

2020年1月21日に収録された『テラスハウス』第38話において、後にSNS上で花さんへの中傷が始まるきっかけとなった「コスチューム事件」が起こる。

² 2021年1月19日に開催された第288回放送人権委員会の議事概要（＝BPOホームページ上で公表）によると、委員会は決定文の原案を修正した上で、次回委員会でさらに決定内容について議論を重ねることにしたという。

花さんの試合用コスチュームが、共同生活を送る男性により誤って洗濯・破損されてしまったという。3月31日にインターネットで先行配信された第38話は、5月19日にテレビ放送、つまり公共の電波を通じて視聴されたのである。そこでは、話し合いの場で花さんが男性に抗議する様子が放送され、花さんが男性のかぶっている帽子をはたく映像も映し出された。これらの言動・行動が『テラスハウス』視聴者の話題となり、花さんはSNS上で批判の対象となっていく。

すでにネット配信直後から始まっていた花さんへの中傷はテレビ放送後も続き、花さんはこれらを苦にして自死したと考えられている。一連の報道によると、母・響子さんの告訴を受けた警視庁は、花さんのネット閲覧履歴から約600アカウントにのぼる1,200件ほどの投稿を精査した。それらの内、およそ300件が中傷コメントに分類され、特に悪質なコメントの発信者については侮辱罪の疑いで書類送検されるに至った。

響子さんは、花さんに中傷が殺到したことについて、『テラスハウス』の番組体制に問題があると考え、2020年7月15日にBPOの放送人権委員会に申立てを行った。すなわち、帽子をはたいた場面は「過剰な演出」によるもので、「娘は番組で狂暴な女性のように描かれた」のだという。これにより、「番組内に映る虚像が本人の人格として結び付けられて誹謗中傷され、精神的苦痛を受けた」ことで人格権が侵害され、「全ての演出指示に従うなど言動を制限する」等の条項を含む「誓約書兼同意書」による支配関係のもと自己決定権が侵害されたとして、フジテレビに謝罪を求めている³。

放送人権委員会は申立てを受け、2020年9月15日に審理開始を決定した。その後、委員会は10月20日に申立人（響子さん）と被申立人（フジテレビ）双方から提出された書面をもとに論点を整理し、11月17日にヒアリング実施に向けた質問項目の策定を行った。そして12月15日には、5時間にわたり双方のヒアリングを実施している。被申立人のフジテレビは、番組に過剰な演出はなく、女性を暴力的に描いたことはないとして「人権侵害も放送倫理に

³ 放送人権委員会「ニュース・トピックス」（2020年9月15日）（https://www.bpo.gr.jp/?p=10510&meta_key=2020、最終閲覧日2021年1月6日）。

反することもない」と主張したという。

Ⅲ. リアリティ番組とは

2012年の『TERRACE HOUSE BOYS×GIRLS NEXT DOOR』以来、『テラスハウス』シリーズは、事件が起こる『TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020』の第5期まで制作されてきた。また一連の『テラスハウス』シリーズは、台本が存在しないリアリティ番組であることが謳われてきた。ではリアリティ番組とは何か。テレビ番組に「台本が存在しない」とは何を意味するのか。リアリティ、つまり「現実・真実を見せる」番組であるということなのだろうか。

リアリティ番組についての論考は、リアリティ番組の制作が盛んな欧米で多数の学術論文が存在する。これに対し日本では、それら海外における動向の紹介以外、ほとんど研究されてこなかったと言って良いだろう。このたびの『テラスハウス』事件を受けて執筆され、日本社会にとって示唆に富む文献を挙げるならば、現時点では次の2つが代表的である。一つはNHK放送文化研究所が発行する『放送研究と調査』2020年10月号に掲載された、村上圭子氏の執筆による「『テラスハウス』ショック①～リアリティーショーの現在地～」⁴である。もう1つは、放送批評懇談会が発行する『GALAC』2020年12月号の特集「リアリティーショーとは何か」に寄せられた論考7本と解説である。

村上論文は、「リアリティ番組」や「リアリティテレビ」など様々な呼称を「リアリティーショー」に統一している。その上で、「リアリティーショー」の定義について、複数の試みはあるものの⁵、いずれも決定的ではないとしている。それでも、安価な制作費で高い視聴率が取れること、30代以下の若年

⁴ 村上論文では「リアリティー」と表記されている。文献により「ー」の在り無しは様々である。引用・参考文献での原文表記を除き、本稿では「リアリティ」とする。

⁵ たとえば在米研究者の定義（2015年）では、「事前に計画された、しかしほとんどが台本なしの番組で、ノンフィクション的な設定のもとでプロの俳優ではない人が出演するもの」とされている。

層の関心を集めること、あるいは「投票によって追放する出演者を決め、最後まで残った出演者には多額の褒賞が与えられる」といった共通する番組要素から、リアリティショー誕生期の2大番組として『ビッグ・ブラザー』（1999年～オランダ）と『サバイバー』（2000年～米国）を挙げている。村上論文はさらに、この2大番組の成功を受けて類似番組が量産され、番組形式が世界中に輸出されていったことを丁寧に追跡した上で、番組内容の過激化や出演者の相次ぐ自死といった問題の深刻化を指摘している。

一方、『GALAC』誌における特集論考の一本である、土屋敏男氏による「『テラスハウス』は、実はドキュメントバラエティだった。」は、「欧米のリアリティショーと日本のドキュメントバラエティは構造的な違いがある」と指摘する。自らが『進め！電波少年』（1992年～日本テレビ）といったドキュメントバラエティ番組の制作者であった土屋は、「その場で起こったことを単に編集して切り刻むのではなく、対象をどういう方向に追い込んでいくかという方法を使っています」と、制作者側の意図する方向へと出演者を状況的に追い込んでいく制作手法を明かしている。一方、「欧米のリアリティショーなら、『ここで、こういうふうに言ってくれ』と、出演者にはっきり言うケースも多いだろう」と、推測ながらも日本との制作手法の違いを示唆している。

この、欧米のリアリティショーと日本のドキュメントバラエティの違いについては村上論文でも言及されており、特に樫村愛子氏の論考「『リアリティショー』の社会学的分析」を引いて、「日本版リアリティショー」の可能性、つまりは日本独自のリアリティ番組の「在り方」に言及している。

事実、米国の視聴者にとって日本の『テラスハウス』は、リアリティショーとしては異質に見えるようだ。すなわち、アメリカの『タイム』誌は、『テラスハウス』シリーズ4作目『TERRACE HOUSE OPENING NEW DOORS』を2018年度のベスト10テレビ番組の6位に位置づけ、以下のように評している⁶。

⁶ Judy Berman, "The 10 Best TV Shows of 2018," *Time Magazine*, (Nov. 15, 2018). <https://time.com/5454751/best-tv-shows-2018/> (accessed Jan. 15, 2021).

Japanese reality franchise *Terrace House* is an extremely low-drama upgrade of the *Real World* formula, gathering mostly good-hearted young singles in a luxurious home and hoping they hook up. 日本から配信されるリアリティショーの『テラスハウス』は、『リアルワールド』型からドラマ性を極力排したものである。良心的な独身の若者が豪華な一軒家に集まり、カップルになることを望んでいる。(翻訳は筆者)

『リアルワールド』とは、米国のケーブルテレビにおける音楽専門チャンネルMTVで1992年に始まったリアリティショーで、数名の若い男女が共同生活を送る日常にカメラが入り込む。制作シーズンごとに共同生活する都市や建物の形態は異なるが、同居人の間でトラブルが起こるのはシーズン共通である。日本の『テラスハウス』は、リアリティショーの様々な形態の中でも、まさに『リアルワールド』型と言える。しかし、『タイム』誌は『テラスハウス』を、同じ『リアルワールド』型でも「ドラマ性を極力排したもの」と評価しているものであり、これは「日本版リアリティショー」という小分類が可能であることを示している。

とはいうものの、『テラスハウス』シリーズが「ドラマ性」から全く無縁であったわけではない。2014年5月29日号の『週刊文春』が、「内部告発『テラスハウス』は牢獄です!」という記事で、番組の「セクハラ・パワハラ」「やらせ」等の疑惑を報じている。また、花さんが亡くなった事件についても、『週刊文春』は『テラスハウス』の「やらせ」疑惑を2020年7月に3週にわたって特集している。これら「やらせ」疑惑に対し、フジテレビは『テラスハウス』事件について検証を行った報告書で反論している。次節でそれを追ってみよう。

IV. 一時的考察

冒頭で述べたように、本稿の執筆時点では放送人権委員会の委員会決定は公表されていない。委員会決定と併せて明らかになるであろう種々の事実が、『テラスハウス』事件の本質を論考する手立てとなるに違いない。したがって、

以下は現時点で公表されている資料をもとにした、一時的な考察である。

2020年7月31日、フジテレビは内部調査にもとづく「『TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020』検証報告」を公表した。当該報告書の公表に先駆けフジテレビは、7月8日に開催された「フジテレビ番組審議会」⁷において、審議委員らに検証内容を知らせている。その際、審議委員から次のような疑問が提示された。「早急に利害関係のないメンバーで構成された第三者委員会を設置して客観的視点から再調査を行うべきではないか。」（報告書p.13ならびに第499回番組審議会議事録概要）つまり審議委員たちは、フジテレビによる内部調査の客観性に疑問を呈していたと思われる。

これに対しフジテレビは、当該報告書において「第三者委員会を設置しなかった理由」（報告書p.14）を次のように述べている。「外部の独立委員のみの第三者委員会では、調査対象である番組関係者等が、発言を控えたりする懸念」「検証における聞き取りの対象となる制作スタッフや出演者の中には、木村花さんが亡くなったことに強いショックを受けている者が複数おり、外部の独立委員による聞き取りを行った場合、過度な精神的負荷を強いることが懸念されるとともに、却って適切な証言を得られなくなる可能性もある（下線は筆者）」といった説明をしている。

しかしながら、まず前者の説明について、もし第三者委員会の調査に対し、調査対象が「発言を控えたりする」のであるならば、そもそもこのたび『テラスハウス』事件を審理することとなったBPOや、放送法に定めのある番組審議会制度の存在意義が問われることになりはしないだろうか。一般的には、むしろ利害関係のない第三者委員にこそ、調査対象は心を開くことができると考えられているのであり、だからこそ一般社会は問題が生じた際に第三者委員会を設置するのである。

さらに後者の説明について、外部の独立委員が聞き取りを行った場合は

⁷ 放送法第6条1項により、放送事業者は放送番組審議機関の設置が定められている。事件当時のフジテレビ番組審議会のメンバーは次の通り（敬称略）。梓澤和幸（弁護士）、井上由美子（脚本家）、岡村美奈子（大学教員）、小山薫堂（放送作家）、最相葉月（ライター）、増田宗昭（実業家）、三浦瑠璃（学者）。

「却って適切な証言を得られなくなる可能性」が示唆されているのだが、これについては誰にとつての「適切な証言」かが問われることになるだろう。すなわち、その意味するところが、内部調査者にとつての「適切さ」をも含むことになる、『テラスハウス』事件の当事者であるフジテレビにとって、都合の悪い証言は排除されてしまうことになりかねない。検証の目的が、あくまで事実の究明や真実の追求にあるのならば、「適切さ」とは、本件と利害関係のない第三者委員会にこそ委ねられるべきものであろう。

さて、その検証内容であるが、『週刊文春』が2020年7月9日号から3週にわたって報道した『テラスハウス』の「やらせ」疑惑を、フジテレビ自らが否定している部分がある。

一部の報道等では、本番組において、いわゆる「やらせ」があり、上記テロップ（＝「台本は用意していません」と番組冒頭に示される文字列）や番組コンセプトに虚偽があるかのような点が問題視されています。いわゆる「やらせ」とは、存在しない事実を捏造したり、制作スタッフが出演者に対し、事実を大きく歪曲したりするよう指示しているにもかかわらず、それらがなくないように表示することを意味すると理解されるところ、そのようなことは確認されませんでした。（報告書p.3）

一連の『週刊文春』報道は、「やらせ」という言葉を、「番組スタッフの指示」による「過剰な演出」といった一般的な意味合いで、かつ具体的な指示内容（「スタッフが『ビンタしたらいいじゃん』とけしかけ」＝後掲「『テラスハウス』事件関連・時系列表」参照）とともに使用している。これに対しフジテレビの検証報告書は、「いわゆる『やらせ』とは、存在しない事実を捏造したり、制作スタッフが出演者に対し、事実を大きく歪曲したりするよう指示しているにもかかわらず、それが無いかのように表示すること」と、「やらせ」を事実の歪曲が大きい場合に限定しつつ反論している。しかしこれでは、小さな歪曲なら許容されている印象を与えるし、「小さな歪曲」と「大きな歪曲」の線引きがあたかも存在するかのようでもある。自身もドキュメンタリー番組の制作に携わってきたメディア研究者の水島宏明氏は、報告書

は（「やらせ」を）「狭い意味に定義した上でそうした事実が『確認されませんでした』と結論づけている」とフジテレビの姿勢に批判的である⁸。

V. おわりにかえて

『テラスハウス』は、次のようなナレーションで番組が始まる。

「『テラスハウス』は見ず知らずの男女6人が共同生活する様子をただただ記録したものです。用意したものは、素敵な家と素敵な車だけです。台本は一切ございません」（下線は筆者）。

物理的な「台本」は、『テラスハウス』には確かに存在しなかったのであろう。「ただただ記録」についても、収録形態としては確かに記録に徹していたと言えるのであろう。しかしながら、番組の表層には現れることのない、番組の背後にある何らかの構造的な問題が、結果として花さんを死へと追い詰めてしまったのならば、やはり問題は解き明かされなければならないし、類似事件の再発防止にもつながらない。

前述のフジテレビによる検証報告に対して、番組審議委員らは次のようにも疑問を呈している。「制作者と出演者との間に誓約書があり、違反して制作に影響がでた場合は、一話分の制作費を最低として賠償するとのこと。これは、労働契約の不履行について、賠償予定の禁止を定めた労働基準法16条違反ではないのか」（報告書p.14、第499回番組審議会議事録概要）。これに対しフジテレビは、「この契約については、専門家から違法なものではないとのご意見を頂いております」（報告書p.16）と述べているが、現時点では当該「同意書兼誓約書」の内容は公表されていない。

花さんは何に同意し、どのような誓約をしたのか。一連の報道によると、花さんはこの部分について黙っていたわけではなく、響子さんや友人に番組で「プロレスラーらしく振舞うよう」求められたことを告白している。ところが、その告白は今にして思えばあまりに限定的で、プロレスラーらしい振

⁸ 水島宏明「テラハ検証でフジテレビが使った『ごはん論法』」『Yahoo! News Japan』（2020年8月1日）（<https://news.yahoo.co.jp/byline/mizushimahiroaki/20200801-00191109/>、最終閲覧日2021年1月11日）。

る舞いの「求められ方」について必ずしも明瞭ではない。それ故に、花さんの告白については、フジテレビ側の内部調査に黙殺を許す結果を招いてしまったように思われる。

故人に鞭打つことになってはいけませんが、死を選ぶくらいなら、なぜもっと積極的な告発手段をとらなかったのだろうか。悪質な誹謗中傷に対し、声をあげて「暴力的な女性を演じるよう指示されていた」(=『週刊文春』報道)と世間に訴えかけることは正当な自己防衛ではないか。花さんの、プロレスラーとしての職業意識がそれを躊躇させたのだろうか。あるいは『テラスハウス』出演にあたって交わした同意書兼誓約書が障害になったのであろうか。もしくは「障害になるのでは」といった思い込み、つまりは契約不履行による損害賠償を花さんが恐れた可能性はないのだろうか。放送人権委員会による委員会決定の公表が待たれる。

『テラスハウス』事件関連・時系列表

(新聞・週刊誌等による一連の報道をもとに筆者が作成)

2012年

10月 フジテレビ、『テラスハウス』の第一期『TERRACE HOUSE BOYS×GIRLS NEXT DOOR』地上波放送開始(－2014年)。以降、『TERRACE HOUSE BOYS & GIRLS IN THE CITY』(2015－16年)、『TERRACE HOUSE ALOHA STATE』(2016－17年)、『TERRACE HOUSE OPENING NEW DOORS』(2017－18年)、『TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020』(2019－20年)を順次制作・放送。2015年よりインターネット映像配信事業者であるNetflixがネット配信を開始。

2014年

5月29日 『週刊文春』(2014年6月5日号)が「内部告発『テラスハウス』は牢獄です！」と題する記事を掲載(=『テラスハウス』に対する最初の「やらせ」疑惑報道)。

2016年

- 3月31日 木村花さん（当時18歳、以降「花さん」と表記）、半年の練習期間を経てプロレスデビュー。

2019年

- 4月 花さん、所属プロレス団体を移籍。
- 5月14日 フジテレビと株式会社イースト・エンタテインメントの共同著作番組『TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020』（以降、『テラスハウス』と表記）Netflix配信開始。7月から地上波でも放送開始。
- 10月22日 『テラスハウス』第20話配信（地上波放送は12月）。この回より花さんが出演。

2020年

- 1月21日 『テラスハウス』第38話収録。花さんのプロレス試合用コスチュームが他の男性出演者により誤って洗濯・乾燥、破損される。ダイニングルームでの話し合いの場で、当該男性に花さんが抗議した際にとった行動（＝男性の帽子をはたく）が、「コスチューム事件」として話題になる。
- 3月31日 『テラスハウス』第38話Netflix配信。その後SNS上に花さんに対する誹謗中傷が相次ぐ。花さんはそれらに悩んでいること、自傷行為に及んだことなどを自身のSNSに投稿。
- 4月13日 新型コロナウイルスの影響により『テラスハウス』収録・配信休止。
- 5月14日 『テラスハウス』第38話につき、「コスチューム事件」後日談の未公開映像がYouTubeで公開される⁹。

⁹ 後日談の公開については、「テラハ名物の "家族会議" 的な図式が成り立っていた」「テラハ史に残る修羅場がこのような形で回収された」と、肯定的な意見もある。Jun Fukunaga 「『コスチューム事件』 その後を巡る対立で久しぶりに見られた "番組名物"—『テラスハウス』第41話未公開映像』『リアルサウンド』2020年5月18日 (https://realsound.jp/tech/2020/05/post-553609_3.html、最終閲覧日2020年1月14日)。

- 5月15日 母親の響子さん（47歳）、花さんから「やらせ」について初めて聞かされる（＝『週刊文春』報道）。
- 5月19日 フジテレビ、『テラスハウス』第38話を地上波で放送。
- 5月中旬 Twitter上に、花さんに向けた「性格悪いし、生きてる価値あるのかね」「いつ死ぬの？」等の書き込み（これらは、後に書類送検される20代男性によるもの）。
- 5月23日 花さん死去（当時22才）。花さんから響子さんや友人宛にSNSメッセージ「毎日100件近く…死ね、気持ち悪い、消えろ」「弱い私でごめんなさい」が送信されていた（＝『週刊文春』報道）。
- 5月26日 フジテレビ、『テラスハウス』第39話放送取りやめ。翌日、番組収録中止を決定。
- 5月29日 花さんの通夜。翌30日告別式。花さんと同じプロレス団体に所属する同僚のレスラーが「本当は相手の気持ちになってゆっくり話を聞いてあげて、優しい言葉をかけてあげられる子（＝花さん）でした」と弔辞。
- 7月2日 『週刊文春』7月9日号、「テラハに出た当初からプロレスラーらしく振舞って…一のことを百にして盛り上げて欲しいって言われて。コスチュームの件はスタッフにめっちゃ煽られた」などと、花さんが響子さんに語った内容を紹介。番組スタッフの指示があったことを示唆。
- 7月8日 フジテレビ番組審議会の委員らが、第499回番組審議会において、フジテレビによる内部調査をもとにした『テラスハウス』検証報告書について内容を知らされる。その内部調査に対し、審議委員らから「早急に利害関係のないメンバーで構成された第三者委員会を設置して客観的視点から再調査を行うべきではないか」「出演者に損害賠償を誓約させたのは、労働基準法16条違反では」等の意見。
- 7月15日 響子さんが、BPOの放送人権委員会に「娘の死は番組内の『（暴力的な女性のように）過剰な演出・編集』がきっかけでSNS上

に批判が殺到したため」として、人権侵害を申立て。

- 7月31日 フジテレビ、『テラスハウス』関係者27人（その中でも特に花さんと直接やり取りのあった制作スタッフならびに共演者10人）の聞き取りにもとづく検証報告（全16ページ）を公表。報告書は「指示、強要は確認されませんでした」と、「やらせ」疑惑を否定。さらにSNS上の中傷について、花さんへの番組スタッフによるケアが行われていたとする。一方で報告書は、響子さんへの聞き取りや、花さんが遺したSNS上の記録は検証しておらず、報告書公表についても響子さんへの事前連絡が無かったとされる（＝一連の報道による）。
- 8月6日 響子さん、政府与党の「インターネット上の誹謗中傷・人権侵害等の対策プロジェクトチーム」会合に出席。現行法は中傷被害者にとって、加害者特定のハードルが高すぎると訴え。また、フジテレビの検証報告書に対し「制作サイドの言い訳が並べられたような、本当に目を疑うような内容」と記者会見で批判。
- 8月26日 ABEMAテレビ（地上波ではなくネット配信）のリアリティ番組『いきなりマリッジ シーズン4』の出演者が死去。本人に対する誹謗中傷はなかったとされており、死因は明らかでない。
- 9月15日 BPOの放送人権委員会が第284回委員会開催。「リアリティ番組出演者遺族からの申立て」につき審理開始を決定。
- 10月20日 放送人権委員会が第285回委員会開催。「リアリティ番組出演者遺族からの申立て」につき、申立人（木村響子さん）と被申立人（フジテレビ）双方から提出されている書面をもとに論点整理。
- 11月17日 放送人権委員会が第286回委員会開催。「リアリティ番組出演者遺族からの申立て」につき、ヒアリング実施に向けた質問項目の絞り込み。
- 12月15日 放送人権委員会が第287回委員会開催。「リアリティ番組出演者遺族からの申立て」につきヒアリングを実施。5時間にわたり双方のヒアリングを実施後、委員会決定の方向性について意見

交換。

12月17日 警視庁捜査1課、花さんをSNS上で誹謗中傷した複数人の1人として20代男性を侮辱容疑で書類送検。響子さんは「自ら謝罪した人¹⁰を告訴するのは苦渋の選択だったが、許してしまうと花の死が無駄になる。世間に知ってもらい、誹謗中傷のない世界にしたい」「加害者が被害者になる悲しい連鎖は、花も望んでいない」とコメント、当該男性が特定され中傷されることがないように願ったという。

参考文献・資料

場合敬子『女子プロレスラーの身体とジェンダー 規範的「女らしさ」を超えて』（明石書店、2013年）。

NHK「ネットのひぼう中傷 なくすために ～女子プロレスラーの死～」『クローズアップ現代プラス』（2020年6月4日放送）（<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4425/>、番組スクリプト・最終閲覧日2021年1月9日）。

王美慧「投稿する前 しっかり考えて」『産経新聞』（2020年1月9日）。

大野択生、守真弓、清宮涼「切り売りされる『素の自分』 リアリティ番組の危うさ」『朝日新聞』（2020年5月25日）（<https://digital.asahi.com/articles/ASN5T6QVLN5TUCVL012.html>、最終閲覧日2021年1月10日）。

太田省一「日本におけるリアリティショーの歴史と現状」『GALAC』283号（2020年12月）：14-19。

音好宏「メディア環境の変化と放送の公共性の諸相」、日本民間放送連盟・研究所編『ネット配信の進展と放送メディア』（学文社、2018）、164-178。

亀井好恵『女子プロレス民族誌—物語のはじまり—』（雄山閣出版、2000年）。株式会社フジテレビジョン『「TERRACE HOUSE TOKYO 2019-2020」検証報告』（2020年7月31日）（https://www.fujitv.co.jp/company/news/200731_2.pdf、

¹⁰ 当該男性は6月下旬の時点で、自身が行った花さんへの誹謗中傷について、遺族に対しメールで謝罪していたという（＝『朝日新聞』報道）。

『テラスハウス』事件をめぐる一考察：BPO放送人権委員会による審理開始をきっかけに

最終閲覧日2021年1月11日）.

「木村花さん テラスハウス 母が衝撃告白 10時間 『娘はフジテレビに
殺された』』『週刊文春』（2020年7月9日）：27-32.

桑波田仰太、小松大騎、北野裕子「ネット中傷 止まらぬ被害」『産経新聞』
（2020年1月9日）.

六戸常寿「BPOの意義と課題」、日本民間放送連盟・研究所編『ソーシャル
化と放送メディア』（学文社、2016年）、98-129.

総務省『情報通信白書 令和2年版』（2020年8月）([https://www.soumu.
go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/index.html](https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/index.html)、最終閲覧日
2021年1月11日）.

土屋敏男「『テラスハウス』は、実はドキュメントバラエティだった。」
『GALAC』283号（2020年12月）：28-30.

津田環「出演者の心と生活を守ることが、制作者の責務」『GALAC』283号
（2020年12月）：31-33.

常見陽平「木村花さんを守ることではできなかったのか？『働き方』視点で
考える」『現代ビジネス』（2020年5月28日）([https://gendai.ismedia.jp/
articles/-/72872](https://gendai.ismedia.jp/articles/-/72872)、最終閲覧日2021年1月11日）.

「『テラハ』木村花さんを侮辱の疑い 20代男『復讐で』」『朝日新聞』（2020年12
月17日）([https://digital.asahi.com/articles/ASNDK33MCNDKUTIL009.
html](https://digital.asahi.com/articles/ASNDK33MCNDKUTIL009.html)、最終閲覧日2021年1月10日）.

成川栄一「木村花さん葬儀&メモリアル写真館」『週刊プロレス』2068号（2020
年6月17日）：35-39.

西森路代「リアリティーショーとSNSの密接な関係」『GALAC』283号（2020
年12月）：34-37.

長谷川朋子「世界のリアリティーショー最前線 なぜヒットコンテンツが生ま
れるのか」『GALAC』283号（2020年12月）：20-23.

水島宏明「テラハは『やらせ』疑惑に加えて『人権侵害』疑惑も！ BPOは"ダ
ブル審議"で検証すべきでは？」『Yahoo! News Japan』（2020年7月11日）
(<https://news.yahoo.co.jp/byline/mizushimahiroaki/20200711->

『テラスハウス』事件をめぐる一考察：BPO放送人権委員会による審理開始をきっかけに

00187657/、最終閲覧日2021年1月11日）.

水島宏明「テラハ検証でフジテレビが使った『ごはん論法』」『Yahoo! News Japan』(2020年8月1日) (<https://news.yahoo.co.jp/byline/mizushimahi-roaki/20200801-00191109/>、最終閲覧日2021年1月11日）.

水島宏明「BPOはリアリティーショーの基準を示すべきだ」『GALAC』283号(2020年12月)：24-27.

武藤弘樹「リアリティー番組で相次ぐ悲劇、私が『テラスハウス』に没頭した理由とリスク」『Diamond Online』(2020年10月3日) (<https://diamond.jp/articles/-/250270>、最終閲覧日2021年1月11日）.

村上圭子「『テラスハウス』ショック①～リアリティーショーの現在地～」『放送研究と調査』834号(2020年10月)：2-33.

渡邊悟「放送における『リアル』の構造とは—リアリティー・リテラシーの必要性」『GALAC』283号(2020年12月)：38-39.

Austin, Karen D. "Reality Corrupts; Reality Television Corrupts Absolutely," In Peculiar Portrayals: Mormons on the Page, Stage and Screen. Edited by Mark T. Decker and Michael Austin, 183-196. Logan, Utah: Utah State University Press. https://digitalcommons.usu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1080&context=usupress_pubs (accessed Dec. 26, 2020).

Gilbert, Matthew. "The House That Roared," Boston Globe (March 6, 2011). http://archive.boston.com/ae/tv/articles/2011/03/06/mtvs_the_real_world_has_influenced_a_generation_of_reality_shows/?page=full (accessed Dec. 30, 2020).